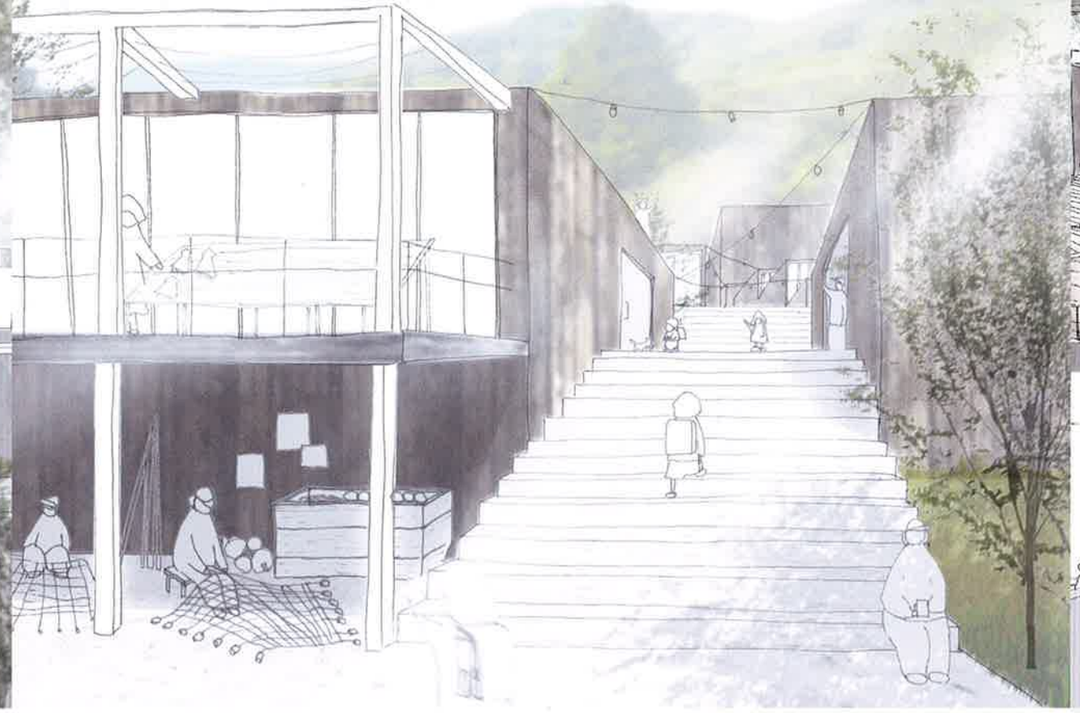
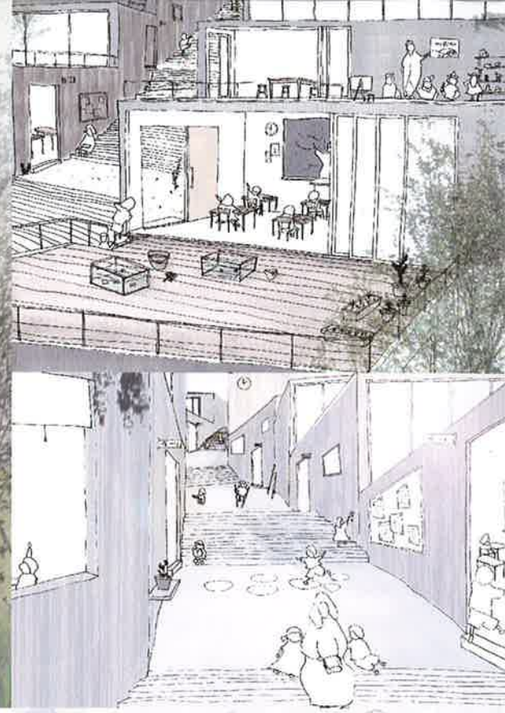
fishery school

— 被災した小学校、そして港周辺に位置し全壊した漁業関連施設の復興計画の提案 —



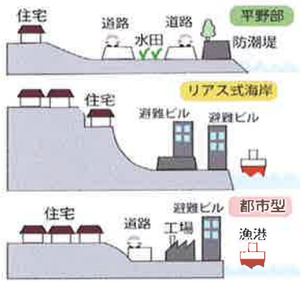


■コンセプト

東北大震災において被災した唐丹町小白浜町に小学校を計画する。この地域の小学校が位置する一帯は海抜10m未満の地域であり
本来防災拠点となるはずの小学校がその役割を果たせず、今回の津波では三階まで浸水半壊状態となってしまいました。
復興の際、一帯の土壌の底上げが考えられるであろうが、範囲が広くコストも膨大で、少子化も進む。この町に新たな校舎を造る。
この町の中心産業である漁業の関連施設と複合させた小学校を港近くの斜面地に作ることを提案する。
二つの機能を持たせることで、それぞれを別に建てるのと比べて、コストを削減することができる。
この地域では亡くなった方が少なく、さらにこれから先何十年と少子化が進んでも、複数の施設を複合させているので、
その中でのウェイトを公共施設にシフトさせて　いけば、この建物は始めの姿のままこの町で
使われていくこととなり、新校舎を建てる意味も大きくなる。町と一体になった学校になり地域活性にもつながると考えられます。

■提案

ex:都道府県の提示した復興計画案

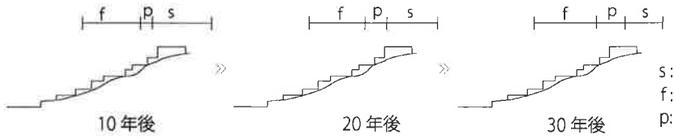


今回提案する計画案

■漁港からの避難経路を内包する

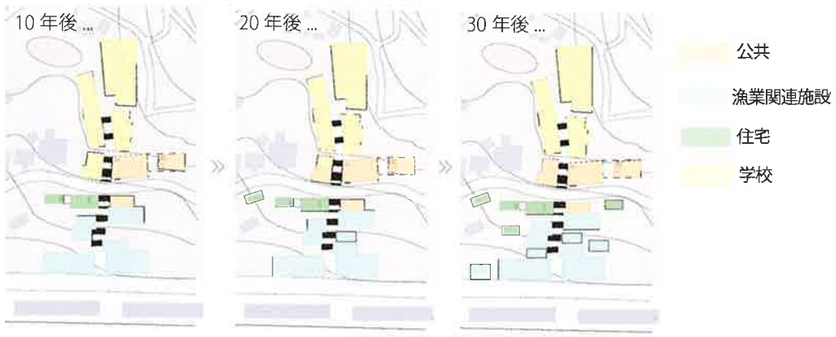
小学校に被災時における避難経路の機能を持たせる。
その避難経路は普段小学校としてのアクティビティと
漁業の仕事のアクティビティを果たせるほか、津波の
来ない常時では漁業に関わる市民の人たちと小学生の
交流も生まれる。町と一体になった学校になり
地域活性にもつながると考えられる。

■機能が時間帯や経年により変化する



s : 小学校
f : 漁業関連施設
p: 公共施設

■経年による道沿いの変化



震災以前から高齢化を問題とするこの地域の現況も踏まえ、機能が経年により変化するような
可能性を提案します。赤が公共施設として振る舞う図書や家庭科室、青が漁業関連施設、
緑が高台移住をした住宅、黄色が学校です。１０年後、生徒数が減り使われなくなった教室は
地域の教室となります。高台移住した住宅が増え、それにともないそこに住む漁師の方々の
倉庫も海への道沿いに増えていきます。３０年後には漁師を引退した後も海の近くで過ごしたい
漁師のひとたちの住宅群へと変化していきます。

■計画対象地